研究班紹介

第3班
海外神社跡地から見た景観の持続と変容

津田　良樹（非文字資料研究センター研究員／研究班代表）

戦前期において大日本帝国が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満洲国を中心に中国などの侵略地に日本人は神社を創設した。それらが海外神社であり、その数は2000箇所にものぼるといわれている。敗戦とともにほとんどの神社は現地人によって、また日本人（軍）自身の手によって破却され、その機能はすべての神社で停止した。

われわれは、神奈川大学21世紀COEプログラムの共同研究のひとつとして、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」のなかで、海外神社跡地の景観変容に取り組んだ。その成果の一部として「海外神社（跡地）調査データベース」を構築し、Web上に公開した。非文字資料研究センターに移行してからも、毎年このデータベースの増補改訂を続けている。さらに、このデータベースの成果を基盤として、在野の研究者なども含めた「海外神社研究会」を発足させた。

本共同研究は、この「海外神社研究会」を母体として、戦後60数年を経た海外神社（跡地）を景観の持続と変容の観点から分析・検討するものである。すなわち、海外神社跡地の現地調査を実施し、各神社の神社創設以前の状況、神社時代の様相、戦後の跡地の持続と変容についての実態解明することを目的としている。

現在までに、神社跡地の景観変容はほぼ4類型に分けられるのではないかと考えている。それらは、①「改変」型、極めて類例が多く、公園（朝鮮神宮・樺太神社）・ホテル（台湾神宮）・宗教施設（南洋群島の和泉神社）・忠烈祠（台湾護国神社）・学校施設（新京神社）などに改変されている場合である。②「放置」型、すなわち荒れるがままに放置され原野・雑木林になっている場合。なお、建国忠霊廟のようにほぼ旧状を維持している場合もある。③「再建」型、少数ながら新たな神社として再建されている場合。④「復活」型すなわち神社が創建される以前の施設に戻った場合などが確認されている。また、それら海外神社跡地の変容の要因についても、戦後の政治体制による政治的要因。その地域の政治体制の転換や日本との関係の変化による要因。その地域の開発の度合い、経済発展の度合いなどによる要因。その地域の伝統文化の違いによる要因。さらには支配者交代を強く印象付け「刻印」するという要因などが考えられている。

以上のような、現在までの数少ない調査事例からの仮説を、多くの現地調査を実施することによって検証・修正するとともに、今なお、必ずしも実態がよくわかっていない海外神社の全貌を明らかにしたいと考えている。

いずれにせよ、台湾・韓国・サハリンなどの現地調査を実施し、神社創建以前の状況、神社時代の様相、戦後神社跡地の持続・変容などの実態を解明することのなかから、海外神社研究の総括が見えてくるのではないかと期待している。

図1　『官幣大社壹彎神社境内之圖』
基隆川に架かる明治橋から本殿に至る神社の全貌を鳥瞰パースで描く。右上部に神社の「由緒略記」が記されている。明治39年6月17日発行、大正11年1月20日増補再版。
（辻子コレクション）